

第4回国際忍者学会大会 発表要旨

研究発表

1. 鉤の陣－新時代を呼んだ甲賀衆の活躍－
横田信也（甲賀忍術研究会）
2. 戦国時代の甲賀は人材の宝庫
渡辺経俊（甲賀忍術研究会）
3. 甲賀組望月氏と甲賀忍者を名乗った野田望月氏
田村幹夫（甲賀忍術研究会）
4. 岸和田藩甲賀五十人を探る
西田武史（甲賀忍術研究会）
5. 甲賀のくすり「忍術丸」
富田実成（日新薬品工業株式会社）
6. 滋賀県とタイ東北コンケン県の山岳民族性の比較研究
－観光資源としての忍者を地域に根差した知恵と見るための学び－
黒川清登（立命館大学）

ポスター発表

7. 防災訓練の実施に対する忍者の知恵の活用
－防災マインドを持続させる忍者の動きを事例として－
枝元美帆（立命館大学経済学部経済学科）
8. 現代に生きる忍者の知恵を活かしたメンタルヘルスケアの可能性
－甲賀市の忍者愛好家と大学生を事例として－
尾上みか（立命館大学大学院経済学研究科）

鈎の陣－新時代を呼んだ甲賀衆の活躍－

横田信也（甲賀忍術研究会）

京都を中心に11年間も続いた応仁の大乱は、隣国の近江にも広がる。近江守護・六角高頼は社寺や公家、幕府奉公衆たちの荘園・領地を武力による強奪、押領していった。

公権力としてそれを見逃すわけにはいかない9代将軍・義尚は、諸大名を動員、自ら近江へ出陣した（長享元年9月12日）。幕府軍は栗太郡内の拠点制を制覇し、10月4日、将軍・義尚は栗太郡鈎郷の安養寺、さらに同地に近い真宝館（現・永正寺）へと本陣を移した（10月27日）。これが世に名高い「鈎の陣」である。この義尚本陣を中心として、草津・守山に及ぶ周辺一帯に諸大名が陣を張り、鈎の陣はまさに「幕府」そのものであった。敵わないとみた六角高頼は、それ以前の9月中には本城の観音寺城を撤退、甲賀三雲城へ入った。

「終に高頼一戦に打ち負け、おのれが居城観音寺城を落ちて山賊の壟、山中、和田という者を頼み、同国甲賀山中に隠れて…（応仁後記録）」

六角高頼は、甲賀から反攻に転じようとしていた。六角氏としてはこの戦いには勝利せずとも負けさえしなければ良かった。その戦略目標を達成するのに必要な能力を持つ者たちが甲賀衆であった。

11月18日深夜、「因幡の陣より火出で、（将軍本陣のある下鈎の辺りは半ば焼失す（後法興院日記）」（一説には12月2日）。

直後の12月9日には守山に陣を敷く織田広近の陣が火災（蔭涼軒日録）。年が明けた長享2年1月9日、三方院政紹の陣、悉く焼失。具足（鎧）紛失（大乘院寺社雑事記）。

5月23日には栗太郡上笠にある浦上則宗の陣が焼失している（大日本史料）。

中央政権側の人物や寺社による記録には以上の様に相次ぐ「火災・焼失」とだけ記録されているが、深夜に火を付けられた側としては、敵の名のりも旗印もなく、何が何だか分からないうちに陣所が焼け落ちてしまった、といったところだろう。しかし甲賀側の記録では、この夜討ちの実績を誇り高く伝えている。「世に伊賀甲賀の忍び衆と名高く言うは、鈎の陣に神妙の働き共を日本国中に大軍眼前に見及ぼし故」（淡海温故録）。

この時期（長享2年2月以降）から将軍・義尚はたびたびの病が記録され長享3年3月26日、ついに死去。幕府軍は「（結城氏）鈎の陣を焼き払い出奔」（蔭涼軒日記）などと秩序なく撤退していった。

先の応仁の乱に続き、この鈎の陣での苦戦と将軍死去という出来事は、その後の幕府に決定的打撃となった。将軍権威の失墜と幕府の弱体化をさらし、権威よりも実力による下

克上の時代が始まるのである。甲賀武士たちの鉤の陣での活躍が、この新しい時代の呼び水になったとも言える。そして、小数による夜討ちやゲリラ戦で大軍を退けた実績により、甲賀衆は各地の大名たちに雇われるようになった。

まさに「甲賀衆・甲賀武士」が「甲賀忍者」として全国各地で活躍する時代が始まったのである。

戦国時代の甲賀は人材の宝庫

渡辺経俊（甲賀忍術研究会）

戦国時代の織田政権の中で、柴田勝家ら譜代の家臣に伍して、重要な家臣となり才能を發揮したのが明智光秀であり羽柴秀吉であったが、同じ時期近江国甲賀郡から幾人もの人材が織田政権の浮揚に貢献しているのである。光秀や秀吉の外にもこんな者達がいたということを知ってもらう意味で、またその後の秀吉や家康の政権浮揚に貢献した外様者達も多かったことを知ってもらう意味で、今回は甲賀の関係者に限りご紹介しようと思う。450年以前の昔、東海地方出身の英傑たちに甲賀から協力した彼らこそが戦国時代に活躍した甲賀の忍びと同根の者達だからである。

1. 信長に臣従した甲賀出身者

近江国甲賀郡と尾張国は中心地同士で直線距離 80 km 以上離れており、隣国でもない。それなのに 450 年もの昔、なぜこんなに多くの甲賀人が織田政権の確立に関わっているのだろうか。特に注目すべき点は彼等のほとんどが自らの意志で織田家に近づいたと思われる点である

2. 豊臣秀吉に臣従した甲賀出身者

秀吉に仕えた甲賀出身者の多くは信長時代の引き継ぎである。秀吉が独自に迎え入れたのは中村一氏、施薬院全宗、木喰応其くらいである。秀吉は甲賀武士を早々に改易(取り潰し)したし、甲賀武士たちも秀吉を嫌っていたので進んで秀吉に臣従することが無かったのである。

3. 徳川家康に臣従した甲賀出身者

徳川家康には元々三河の地元を中心に譜代の臣が多く、関ヶ原の役で東軍につき急に親藩となった地方大名（中村一氏も元は甲賀だがこの一例）を別にすると、武田の武将を抱え込んだほかは、家康直下で働いた東海地方以外の地方出身の有力武将は多くない。その中で甲賀からの家康への臣従者は異例に多く、特に織田・豊臣と乗り越えて来た者達はかなり厚遇されている。

近江国の 12 郡の一に過ぎない甲賀郡からの江戸幕府への登用者数が、500 石以上の旗本に限れば、伊賀国一国からの江戸幕府への登用者数の 2 倍以上であったと云われている。その上、甲賀郡からは大名も出ており、その家老たち（和田氏や荒尾氏など）も含めるとさらに差は開く。要するに戦国時代甲賀には多くの人材が集まっていたと云えよう。

これらの人材は主として飯道山の修験道の修業の中で涵養され、里に下りては村での同名中惣や郡を横断する甲賀郡中惣の運営に携わり、或時は各地の大名から個人や団体で呼び寄せられては甲賀の忍び（甲賀忍者）として重宝され、自らの意思で他所の大名に武士として売り込んで武将として大成して行くという具合に、道は分かれたが元は同根の者達であった。

甲賀組望月氏と甲賀忍者を名乗った野田望月氏

－寛政の訴願をめぐる－

田村幹夫（甲賀忍術研究会）

甲賀郡野田村の望月氏については、寛政の訴願に関わった望月仙蔵と、幕末に「盟言連名書」に名を連ねた望月直江の名が出てくる程度で、その実態はほとんど知られていなかった。

平成 29 年 3 月、望月直江の子孫の家で、望月仙蔵自身が作成した野田望月氏の系図（「望月直江家系図」）が発見されたことで、その状況が一変した。系図からは、甲賀組与力とその知行所の甲賀古士が深く結びついていたこと、その関係が宝暦 13 年の知行所引き上げを境に一変し、それが引き金となって寛政の訴願に至ったことが読みとれる。望月直江家系図は、天明～寛政の頃に野田望月氏第六代の保左衛門によって作成された。系図では、伏見城の戦いの功績で甲賀組与力となり野田に 200 石余の知行所をいただいた甲賀組望月氏初代の津之助と、野田望月氏初代の弥治郎（重實）は、兄弟とされる。またその四代前は、文明 2 年に六角政勝から柚庄内三村を充行された望月弥治（次）郎（出雲守、重胤）とされている。

野田望月氏初代弥治郎（重實）は、浜松城下で剣術指南をしていたが、寛永 15 年島原一揆の節、津之助によって野田村に呼び戻され、松平伊豆守の御供で一揆の鎮圧に参陣した。弥治郎の帰郷は甲賀組の江戸勤めが始まった直後のことで、甲賀組望月氏が江戸へ移住した後の、領地・領民の管理を委ねる目的があったと考えられる。

甲賀組の江戸移住後、野田望月氏は、甲賀組望月氏の口添えで、相給（幕府領）の代官から御支配百姓職・村役免除などの家格を保証された。そして領主の一族として、甲賀組望月氏の後ろ楯で、村内でもまた近隣の望月一族の中でも、有力な立場を維持した。

ところが、宝暦 13 年に甲賀組与力の知行所がすべて御蔵米に引き替えとなったことで、野田望月氏は家格の後ろ楯を失い、村の中で急速に追い詰められていく。天明元年に御料所の庄屋から村役をほかの村人並みに勤めるよう要求されて争いとなり、それを契機に家格の回復を目指して出府し、仙蔵と改名して、江戸で訴願のための活動を始めた。

甲賀組の知行所があった村では、甲賀組与力と古くからつながりのある地元の古士との間で、野田望月氏の場合と同じような関係ができあがっていたようである。油日村の上野八左衛門の場合も、甲賀組与力の知行所引き上げによって村内で追い詰められたことが、訴願に立ち上がる動機であった。天明 5 年の油日大明神祭典の座席を巡る争いも同様に、宝暦 13 年の甲賀組知行所の引き上げによる村内での力関係の変化が引き金と考えられる。

寛政の訴願は、宝暦 13 年の甲賀組与力知行所の引き上げが発端であったこと、甲賀組与力衆とつながりの深かった古士が訴願の中心であったこと、上野八左衛門や望月仙蔵

（保左衛門）らの本心が幕府への仕官よりも家格の回復にあったことから、幕府も疎略に扱うことなく、それなりの対応をしたと考えられる。

岸和田藩甲賀五十人を探る

西田武史（甲賀忍術研究会）

1、新発見の起請文

近年、報告者である西田家の仏壇横戸棚から一通の起請文が発見された。そこには「火術御傳受被下候」という文言とともに、火術伝授を他言しないとの誓約が記されており、「西田文太」から「望月儀三郎」に伝授されたものようであった。

伝授した「西田文太」は、郷土史家和田晋次氏が平成19年(2004)発行の甲賀町郷土史会の会報に発表した報告によれば、江戸時代に岸和田藩に仕えた50人の甲賀武士のうち、1800年時点のメンバーの一人である。また別の史料によると、伝授された「望月儀三郎」は「西田文太」の跡を継いで岸和田藩に支えた人物のようである。

つまり今回発見された起請文は、単なる個人火術伝授の史料ではなく、岸和田藩の甲賀者に関する史料として考えることができる。

2、岸和田藩甲賀五十人の起源

西田文太らが属した岸和田藩の甲賀五十人は、寛永九(1632)年に組織された（これは青山甲賀百人組が江戸に移住した年と同じである）もので、青山甲賀百人組の与力10人の中の梅田武左衛門と和田曾兵衛が当時の大垣城主岡部内膳正長盛に取入って甲賀組の採用を申し入れ、編成された。その後岡部家は竜野・高槻・岸和田と転封するが、その間も城下に定住して15石3人扶持を受ける者と、甲賀在住のまま5石5五斗が給せられる者とに分かれ、「万一要用の節は、御馬の両輪に召し連れられるべしとの契約にて御座候」として仕官を続けた（甲南町深川八幡神社蔵文書）。

3、全体像を調べる

岸和田藩甲賀五十人については若干の先行研究があり、寛永九(1632)年に編成され幕末までずっと人数は50人体制で変動なく、常勤の藩主親衛隊（8人から10人）と甲賀在住の非常勤部隊との2段階構成の甲賀者だったことなどが明らかとなっている。また、代替わりには原則的に子が跡目を継ぐが、子がない時には「甲賀伊賀より筋目の古士」から選抜し、常時50人が維持されていた（上野家文書）。

4、研究の進展のために

しかし彼らの活動記録は余り残っておらず、①貞享2年（1685）9月岡部・岸和田藩2代目藩主が参勤交代で土山を通過する時に「甲賀惣領子供十五以上道中御目見ニ罷出」（望月俊宣家文書）、②田沼家が失脚し居城の相良城を請取りに岡部美濃守が任命され天明7年（1787）12月に「甲賀士一統従ス」（杉谷木村家文書）、③嘉永7年（1854）9月「異国船天

保山沖江入津依之為固出張」(同)などが知られている程度である。

そうした調査状況を踏まえて、現在甲賀の家々から出てきている史料も参考にしながら、今回発見された起請文を読み解き、今後の新史料発見と研究のための材料提供としたい。

甲賀のくすり「忍術丸」

富田実成（日新薬品工業株式会社）

弊社は、“忍者のまち”滋賀県甲賀市にある医薬品メーカーです。

甲賀忍者の歴史を紐解くと、地場産業として発達した“くすり”の歴史と密接に結びついていくことが分かります。その歴史に触れつつ、忍者の知恵と経験から創られた“くすり”について、発表させていただきます。

古の頃、忍者は山伏姿に扮装し、祈禱してお守り札や薬を売り歩きながら、敵の様子を探っていました。任務の途中では、病に罹ることや怪我など、常に身の危険が伴います。我が身を守るためにも自ずといろいろな知識が必要になり、科学、医学、“くすり”の製法等を蓄えていったとされます。

一方で、滋賀県は古代から数多くの薬草にも恵まれていました。

忍術の極意書「万川集海」には、薬草を育て、加工し様々な生薬を生み出したことが記述されています。

このように、甲賀忍者が各地から持ち帰り蓄えた知識を活かした“くすり”の処方や製法が、いつの間にか地域の産業に結び付き、悠久の時を経た今もなお甲賀のまちに存在する数多くの薬関連の工場が、その歴史を裏付けています。

現在まで引き継がれている“くすり”の中に、『忍術丸』という胃腸薬があります。

『忍術丸』には、オウバク、センブリ、ゲンチアナ、エンメイソウ、ケイヒの5つの生薬が配合されています。この『忍術丸』は甲賀忍者筆頭格の望月家が設立した製薬会社で、昭和50年代まで製造されていましたが、その後、弊社が、歴史とともにこの技術を引き継ぎ今日に至りました。

この度、弊社は、この『忍術丸』を現代の技術に合わせてリニューアルいたしましたので、ご紹介させていただきます。

以上

滋賀県とタイ東北コンケン県の山岳民族性の比較研究

-観光資源としての忍者を地域に根差した知恵と見るための学び-

黒川清登（立命館大学 経済学部）

キーワード：山岳民族、忍者の知恵、家内工業、薬草、忍者の子孫

今では日本のような先進国も含め、農村のマイクロビジネスは、農業を基盤としたものから、小売・サービス業へシフトしている。小国においては、小売業は最大の雇用機会を提供しているセクターである。日本の地方政府でも地方経済の活性化のために、より多くの観光客と移住者を呼び込むための努力が続けられている。滋賀県は、社寺仏閣・仏像などの物的な歴史遺産に恵まれており、これら目に見える資産が人々を惹きつけることは比較的容易である。

しかし、目に見えない遺産である先人の知恵や文化で、人々を惹きつけるのは、簡単ではない。しかも、その地域の人々が、その価値を十分認識していないこともしばしば存在する。本研究は、甲賀市とともに2016年から始まった地域経済の活性化への取組を起源としている。その目的は、甲賀市の紫香楽の宮跡や忍者といった地域資源を如何に地域経済の活性化に活用できるかを検討することである。

一方、本学では海外フィールドプログラムを展開し、大学の国際化に力を入れており、本研究者は、2008年以降毎年タイ王国の東北地方に位置する、国立コンケン大学とともに、タイ東北の農村経済の活性化調査に取り組んできた。タイ東北地方は、コラート高原と言われ標高は200-300mで、その西側にはペッチャブーン山脈が広がり、タイ北部と中部をわけ隔てている。その特殊な文化はイサーンと言われる独自のものを有する。

忍者は、滋賀県にとっても重要な観光資源として認識されている。また、タイ東北の山岳地域の少数民族もプータイ族などは、新たな観光地として着目されている。タイでは、この地域資源の見直しに、我が国の一村一品運動から始まったOTOP (One Tambon One Product) が役立っている。甲賀市では、忍者を題材に「忍者大祭」を毎年秋に開催し、2020年秋には、リアル忍者館を開館させるなど、忍者をより活用する動きが強まっている。修験道の一大霊場としての飯道山では、「今も山伏たちが唱える祈りの声が響き渡り、呪文と印を結ぶ山伏の姿や、もくもくと焚き上げる護摩の煙に、現代に生きるリアルな「忍者」が感じられます。」(甲賀市HP) など山岳文化的特徴も触れている。

しかし、観光客が強い関心を持つ宝物であっても、コンケン県、滋賀県のいずれに

も、地域住民自身に地域の持つ宝物への認識が十分ではないという問題も見出された。そのため、それらの資源を活用して、観光客を如何に取り込むかのさらなる学びが必要である。そこで、本研究では以下を主な目的とする。

- ① タイコンケン県の山岳文化と滋賀県甲賀市の忍者の類似性を明らかにし、それらの特徴を活かした観光推進の新たな機会を明らかにする。
- ② 民間企業、団体がそれら地域の宝である、山岳文化や忍者を観光資源として積極的に紹介していく動機を明らかにする。
- ③ コンケン大学、立命館大学はすでに地域コミュニティー、行政関係者などと密接に活動しているが、如何に大学は地域経済の活性化に機能すべきかを明らかにする。

これまでの調査では、これらの2つの異なる地域の薬草・健康管理に対する深い知見、自然と一体となった生活を大切にすることなどの興味深い発見がある。地域経済の活性化にあたっては、これら地域固有の宝物へのさらなる理解が必要で、このような異質と思える両者の比較研究は、それぞれの特徴をより鮮明にする上でも重要である。

防災訓練の実施に対する忍者の知恵の活用

防災マインドを持続させる忍者の動きを事例として

枝元美帆（立命館大学経済学部経済学科）

日本では毎年のように災害が発生している。特に、西日本の太平洋沿岸部では M8-M9 程度の南海トラフ地震が今後 30 年で 70-80% と予想されている。防災対策は喫緊の問題である。なかでも防災訓練は災害時の混乱を防ぐためにも重要な役割を持っている。しかしその効果は一時的で、防災マインドが十分備わっているかは疑問である。その持続性を高めるため、忍者の知恵を取り入れた事例があり、本研究ではそれらの効果を防災訓練への参加率の高い事例とともに検証する。

我々研究チームは、2018 年より甲賀市の協力のもと、防災とまちづくりの研究を行っている。甲賀市では、一部の地域が河川の氾濫や土砂崩れなどの災害を受けており、防災訓練はまちづくりを行ううえで重要な要素である。

岩手県大船渡市赤崎町生形地区では、東日本大震災時に、同地区はほぼ全域にわたり津波の被害を受けたが、300 名以上もの住民が無事であった。その理由はこの地区の防災訓練参加率にある。この地区の 2008 年度の自主防災訓練の参加率は 69.5%、2009 年度は 78.8%、2010 年度は 100% であった。住民が災害に対し適切な訓練ができていたことが甚大な被害を出さずに済んだ一つの要因である。（岩手県、2012）一方、南海トラフ地震の影響を大きく受ける都道府県の一つである大阪府では、毎年 9 月に「大阪 880 万人訓練」を行っている。しかし、2019 年度訓練の事前訓練への参加率は 22.7%、当日訓練の参加率は 20.0%、この訓練と連動して行われた市町村などの防災訓練への参加率は 10.1% であった。（大阪府、2020）防災訓練の参加率は極めて低いと言わざるを得ない。どのようにして防災訓練の参加率を向上させるのか。特に若い世代は防災訓練の参加率が低いと東京消防庁は指摘している。

我々は、甲賀市の防災から忍者は、サバイバル能力に優れており、また忍者食はその栄養素の豊富さから防災食としても注目されていることを学んだ。三重大学の久松特任教授は、忍者食は防災食や災害時の食事の取り方の参考になる、と指摘している。また、忍者は日本のみならず、海外でも認知度が高い。日本忍者協議会の調査（2017）によると、海外計 10 か国における「忍者」という名前を知っている人の割合は 98.7% であった。この特徴を生かし、宮城県仙台市片平地区では、2019 年に「まちに隠された忍者の認定書を手に入れる！～第四回宝探しゲーム 政宗公からの密命～」が開催された。これは、子ども・大人、日本人・外国人が仙台市片平地区を一緒に歩いて地域の防災を楽しく学ぶ活動である。このように、忍者の存在は防災訓練の場でも活用されている。

本研究では、忍者を活用した防災訓練に対し、甲賀市の忍者愛好家、甲賀市役所観光振興

現代に生きる忍者の知恵を活かしたメンタルヘルスケアの可能性

-甲賀市の忍者愛好家と大学生を事例として-

尾上みか（立命館大学大学院経済学研究科）

新型コロナウイルス感染拡大による外出自粛や休業要請により、仕事や生活にストレスを感じる人や「コロナうつ」のような精神的症状を発症する人いる。厚生労働省によると、都道府県・政令指定都市の精神保健福祉センターでの新型コロナウイルス感染症にかかる心の健康相談件数は、緊急事態宣言が出された4月、5月が4000件以上と最も多く、それ以降も1000件以上の相談を受けている。また、主な相談内容は感染に対する不安のような心の不調や、生活、外出、通院、通勤に関する不安やストレスである。2020年11月中旬には、北海道知事は札幌市における新型コロナウイルス感染者の増加を受け、札幌市民に対して不要不急の外出と市外との往來の自粛を要請するなど、コロナ第三波の到来が懸念されている状況にある。このことは、2020年4月からロックダウンにより急遽Webベースの授業へと切り替わり、大学に登校することすらできなくなった大学生のメンタルには重大な影響を与えている。立命館大学新聞社の調査では、10%が退学を25%が休学を検討しているなどの指摘もなされている。

我々調査チームは、2018年4月から甲賀市との協力により、地域経済の活性化、まちづくりに取り組んでいる。そのため、このような危機的な状況が打ち続く中で、身体だけでなく心の健康について、甲賀市の忍者の知恵から学べるものがあると確信し、忍者の文化に根付いた甲賀市の現代の知恵を明らかにすることとした。危険な活動を伴った忍者には、体調やメンタルをサポートするものとして忍者食がある。その中には、蓮肉や朝鮮にんじんなどの生薬が使用されている「兵糧丸」や「飢渴丸」などの忍者食がある。これらの忍者食は、メンタル面での効果も認められている、しかし、その効果を持続性のあるものにするためには、忍者の修行に準じた鍛錬もまた重要な要素である。

そこで本研究では、忍者食や忍者の精神統一、そして現代の甲賀市の忍者愛好家の日常的な鍛錬に着目して、コロナ禍におけるメンタルヘルスケアに活用できるか検証することを目的とする。研究方法としては、滋賀県甲賀市の日常的に忍者としての鍛錬を積んでいる忍者愛好家と一般の大学生を対象にコロナ禍でのメンタルヘルスに関するインタビュー調査とアンケート調査を行い、その比較研究によって、忍者の知恵とメンタルヘルスケアの関係について分析した。

参考文献

1. 久松 眞 (2018) 「忍者の携帯食」 日本調理科学会誌 Vol. 51, No. 3, 190～192
2. 久松 眞 (2016) 「科学から読み解く忍者食～砂糖と生菓の兵糧丸、でん粉と生菓の飢渴丸、口や喉に絞った水渴丸～」 砂糖類・でん粉情報 2016.9
3. 松波志帆・一柳俊樹・久保田央・岩佐拓哉・古市卓也 (2019) 「忍者の食生活と栄養評価」 名古屋経済大学自然科学研究会会誌 (2019) 第 50 卷 第 1 号 6-14.